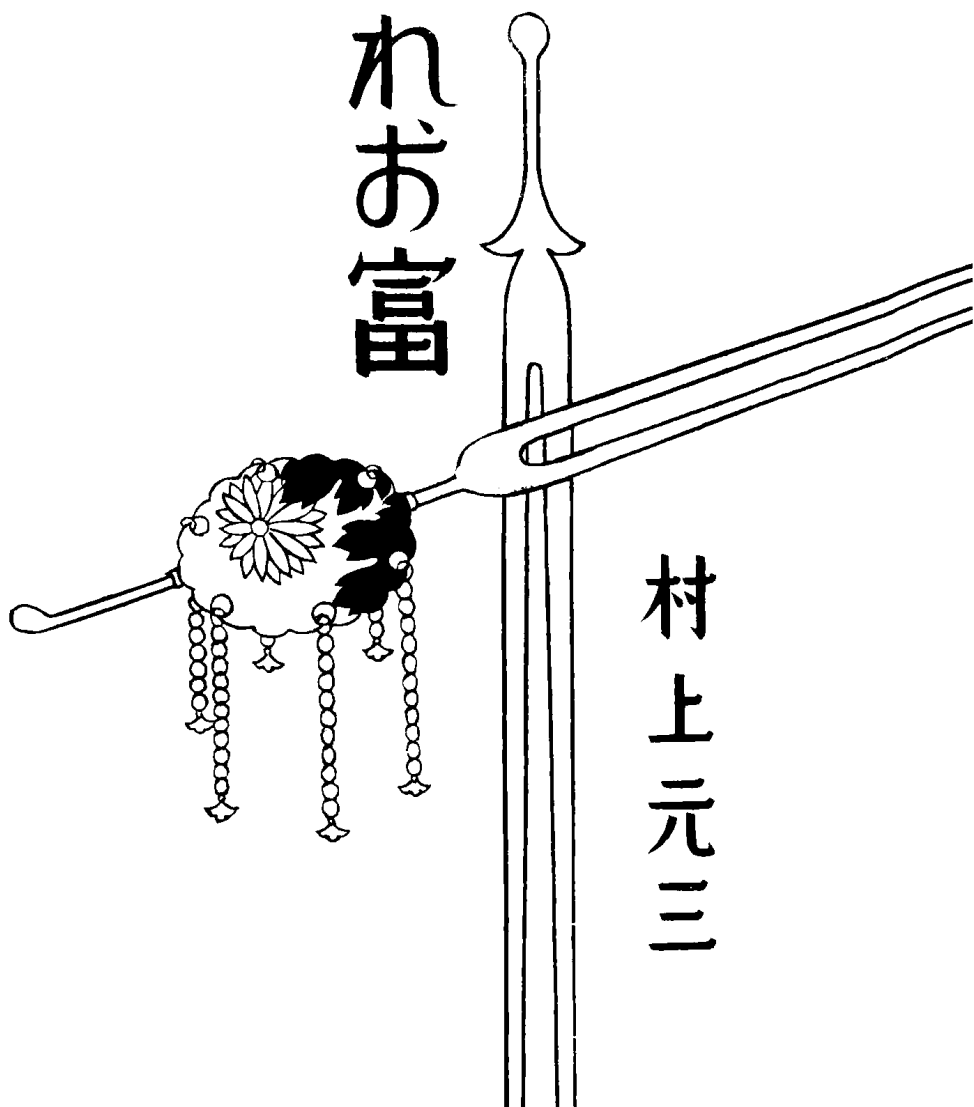




切られお富

村上元三



切られお富

校印 廃止
©一九八一

定価一五〇〇円

昭和五十六年二月十五日初版印刷
昭和五十六年二月二十五日初版発行

著者 村上元三

発行者 高梨 茂

印刷 三晃印刷

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二―八―七
振替東京二―三四

切られお富

目次

矢大臣門長屋

楽屋のれん

敵討免状

横縞染

鬼灯提燈

年の市

鬼は外

宵宮の囃子

夜の声

金糸銀糸

鏡の中の顔

金神遊行

春の嵐

セ

四

四

六

八

一〇

一四

一五

一五

一六

一八

二〇

三

河童の皿

指二本

雪女郎

ゆく春

曾我祭

狐火

四季それぞれ

十月二日

地獄絵

洗い髪

六根罪障

岡蒸気的女

二四

二五

二六

二七

二八

二九

三〇

三一

三二

三三

三四

三五

装幀
山本武夫

切られお富

矢大臣門長屋

秋口によくある通り雨が、音を立てて降っている。

浅草観世音雷門前の広小路は、雨をさけて人が走り、道に雨が白く光って、風も出てきた。

これなら、仕立物をとどけに行つた新堀の呉服屋で、傘を借りてくればよかった。

だが、もう雨雲も切れているし、青空が見えてきた。

お富は、東仲町の薬問屋の軒下で雨やどりをしていた。

けさ結い立ての結綿の頭を濡らしたくないので、手拭を乗せ、裾をからげた。駒下駄をはいた足が、白い。

大川橋のほうから、相合傘で女がふたり歩いてくる。なんの気なしに、近づいてくる傘の下を見たお富は、どきとした。

まぎれもなく、あの女であった。

去年の四万六千日参りの日、観音様の人ごみの中で、あの女は人の紙入れを握りとった。しかし、お富が見たとき

は、商家のおかみさんのような身なりで、眉も剃り、齒も黒くかねをつけていた。

あとから手代風の男が、歩いていった。

大店の主人らしい、よく肥った男とすれ違った、と思つたとたん、女はそのふところから厚ぼったい紙入れを握りとり、あとからくる手代風の男に素早く渡した。

女の巾着切というのがあったのか、とお富はびっくりして足をとめ、女を見ていた。

向うの女も、お富の眼に気がついたのであろう、こわい顔になった。二十三か四か、派手な眼鼻立ちをした女で、口のわきに大きな黒子が目についた。

それきり女も、相棒の若い男も、雑踏の中に姿は消えてしまい、紙入れを握りとられた男も気がつかないらしく、本堂のほうへ歩いて行つたし、お富も、追いかけて行つて教えてやる気も起きなかつた。

あのときの女が、いま眼の前を歩いている。相合傘の下顔は、去年と違って、ちゃんと眉毛もきれいに刷いて、齒にはかねもつけていない。髪は銀杏がえしに縞の袴、小料理屋の女といった身なりだが、口のわきの大きな黒子をはつきりとお富は見た。

「ありがとう存じました。どうやら雨もやみましたようで、濡れずにすみました」

女が礼を言っている対手^{あいて}は、商家のおかみらしい、腹合せ帯と小紋の着物のあいだから、紙入れがのぞいている。

「では、あたしはこれで」

礼を言つて黒子の女は、傘の下から出たとき、相手の紙入れに白い指をかけた。

「あらっ」

思わず、お富は声を出した。

黒子の女は、いそいで指を引っこめ、じろりとお富を見ると、こつちへ近づいてきた。

商家のおかみは空を見あげ、傘をすぼめながら雷門をくぐって行った。

黒子の女は、お富へ低い声で言った。

「見たね、お前。去年のあの小娘だろう」

黒子の女も、はっきりとお富の顔を思い出したらしい。

ことし十六のお富は、白粉もつけていないし、口紅もさしていない。色が白いのは、死んだ母親に似たのだ、と同じ矢大臣門長屋の者たちも言っている。

眉が濃く、切れ長の眼で、鼻筋は通り、唇の形もいい。

ぜんたいに大柄なので、お富は年より二つか三つ上に見られることがある。

「お前、いまあたしの仕事の邪魔をしたね」

身体をよせるようにして、黒子の女は、去年の四万六千

日のときと同じこわい顔つきになった。

女の横から、身幅のせまい着物の、遊び人風の男が近づいた。去年の四万六千日のときは、手代の身なりをしていた男で、女の相棒か乾分^{こづぶん}に違いない。

お富は、頭に乘せた手拭をとり、きちんと畳んで帯にはさんだ。髪は赤い手柄のかかった結綿、黒襟のついた木綿の縞の着物、駒下駄というお富の姿を見て、黒子の女は、こんな小娘に、と腹が立ってきたらしい。

「お前、その顔に傷がついたらどうするね」

おさえつけるように言った女へ、お富は、にこりと笑つた。白い頬にえくぼが出来て、お富の顔が可愛らしくなった。

おどかしているのに、相手の小娘が笑顔を見せるなどとは、案外だったのだろう、黒子の女は眉をつりあげた。

「こわくはないのかえ、お前」

「真つ昼間、雨もあがって、人通りが多くなってるんですよ」

お富は、笑顔のままで言い返した。澄んだいい声が震えてもない、とわかると、黒子の女はお富の顔を平手で打とうとした。

ひょいと顔を避けておいて、こんどはお富が対手を押えつけるように言った。

「女の巾着切がここにいます、と大きな声を出したら困るでしょう。さっさと行っておしまいな、二人とも」

「この小娘、面に似合わず太えことを」

と横にいた若い男が、お富の腕をつかまえようとしたとき、うしろから声が聞えた。

「どうしたね、お富ちゃん」

振り返った男は、声のぬしを見るなり、どきっとして逃げ出しそうになった。

翁庵と襟に染めた印半纏を着て、蕎麦の蒸籠を積んだ盆を肩にした出前持で、名は幸助、町奉行所の御用聞の手先もしている男、と黒子の女も気がついたのだろう。

黙って歩き出した女の背中へ、幸助は声をかけた。

「鍋屋一家のお栄さんだね。その娘のお父つあんは、矢大臣門長屋の丈助、と言やあ知っているだろう。いまは馬道で始末屋をやっているが、十手だこがまだ手に残っている人だ」

お栄といわれた女は、若い男を連れて、田原町のほうへ急いで行った。

幸助のうしろに、黒紋付に着流し、髪を八丁堀風に結った若い侍が立っている。

「お富ちゃん、いまのお栄という女の正体を知ってるのかえ」

幸助に訊かれて、お富は、ほっとしながら言った。

「去年の四万六千日のとき、あの女が、人の懷中物を拘りとったところを見たのさ。さっきも、あたしの眼の前で、どこかのおかみさんの紙入れに手をかけたので、思わず声を出したところ、おどかされてね。でも、幸助さんのおかげで助かりました。ありがとう」

「あの女はね、江戸でも名うての巾着切の親分、鍋屋鶴蔵の妾でお栄というんだ。仕返しをされねえよう、用心したほうがいいぜ」

それから幸助は、若い侍へ言った。

「この子は、もとお上の御用を聞いていた馬道の丈助の娘で、お富と申します。小さいころは吉原の廓でお針子をしておりましたが、まだ十六だというのに、仕立物にかけては男もかなわねえほどいい腕を持っております。諸方にいいお得意様もいるんですから、丈助さんも、なにも始末屋などやらなくても」

「そのあとは言わないで下さいよ、幸助さん。お父つあんもお上へ十手をお返しして、四十にもならないのに、娘に養ってもらうのはいやなんですから」

「そうそう、それでな、お富ちゃん」

蕎麦の蒸籠を乗せた盆を肩に、幸助は、横にいた若い侍を見た。

「ここにおいででの旦那は、ことしの春から北町お奉行所五番組の同心見習をおつとめになっている加田三七さん、とおっしゃる」

「お初にお目にかかります」

お富は、ていねいに頭をさげた。

二十を一つか二つ越したぐらいであろう、面長で、背の高い侍であった。

「加田さんの亡くなったお父様が、やはり八丁堀のお役人だな。お町方の同心は一代抱えだが、加田さんの叔父様がいまでも北町奉行所の与力をつとめておいでになる」

加田三七は、腰に両刀を帯びているが、まだ見習同心なので、十手はさしていない。

「馬道の丈助のことは、おれも聞いている」

と三七は、なぐさめるようにお富へ声をかけた。歯切れのいい言葉つきなのは、やはり父が八丁堀同心だったからであろう。

「盗みをやった奴を見逃して、その親から金をしぼり取った、という疑いをかけられたそうだな。十手捕縄を返したあと、無実とわかったのに、お前の親父もつむじ曲りらしい。仲間の御用聞が、かばってくれなかったというので腹を立て、吉原の始末屋などになったそう。腕のいい御用聞だった、と叔父上からも聞いている。見習の身分だが、

おれもお前の親父に力を貸してもらうことがあるかも知れねえ」

「その節は、よろしくお願い申します」

とお富は、二人へお辞儀をした。

「これから、弟の奉公先へ参りますので」

そのお富へ、幸助は、そつと言った。

「弟のことで、お前も苦勞をするね」

「ご心配をかけて、すみません、幸助さん」

お富は暗い表情も見せず、明るい声で言った。困ったところがあると、かえって強気になるのは、子供のころからの苦勞が、自然にお富をそういう娘にしたのであろう。

「竹次は、お上にお手数をかけるような子にはしません。では、ご免下さいまし」

加田三七と幸助に頭をさげ、お富はぬかるみを避け、広小路から材木町のほうへ入って行った。

もう雨雲は切れて、秋の午すぎの陽が雷門を明るく浮びあがらせている。

竹丁の渡しに近い材木町の河岸に、伊勢屋という古い材木屋がある。町名主もつとめ、浅草寺御用という看板を出して、間口もひろい大きな店であった。

材木の立てかけてある横手へ入り、お富は伊勢屋の台所へまわった。

広い台所で人足たちが茶をのんでいたが、お富の姿を見ると、奥へ声をかけた。

「おい、竹次の姉がきたぜ」

下女が、ちょっと顔を出したが、すぐ店へ引っこんで行く、やがて手代の忠助が台所に出てきた。

「申訳ございません、弟が大それたことをいたしました」
台所の上り框に両手をつかえ、お富は低く頭を下げた。

「竹次がお店から盗み出したのは、一分二朱と聞きました
が、これで」

とお富は、帯のあいだから巾着を出し、一分金一枚と二朱銀一枚を、板の間においた。

「わたくしが仕立物をして頂いたお金でございますから、
お受け取り下さいまし」

「お富さんといったね、お前」

きちんと前掛のひざをそろえ、手代の忠助は切口上になつた。

「盗んだお金を店へ返せば、それで済むと思っているのか
え。お前の弟はまだ十四のくせに、悪い仲間に入って、帳
場の銭箱から金をぬすんだ。うちも店から縄つきを出すの
はいやだから、表向きにはしなかったが、それで竹次はど
こにいるのだえ。ここへ奉公するときは、お前のお父つあ
んに頼まれたからだ、もう旦那に取りなしをするのはご

免だよ」

「わかつております。二度とこちら様にご奉公をしたい、
とはお願いに参りません」

「来られたって、おことわりだよ。それで竹次は、家へも
帰っていないんだらう。宿なしの仲間といっしょに、どう
せろくなことはしていないに決っている」

「お手代さん」

お富の声が、びりっとひびいたので、下女や人足たちが、
びっくりしたようにこっちを見ている。

「竹次に博奕を教えたのは、こちら様の人足さんがた、と
聞いております」

まっすぐ忠助を見ながら、お富は言った。

「十文二十文と賭けているうち、小僧の竹次にとっては大
金の一分二朱の借を作りました」

「お前、なにを言い出すのだ」

手代の忠助も、むっとしたらしい。

「竹次が手なぐさみをして、一分二朱の借を作り、お店の
帳場から金を盗み出したのも、うちの店の人足たちのせい
だというのかえ」

「お店の小僧が、博奕などやっているのに気がつかず、叱
りもしなかったとは、それでよく伊勢屋さんの手代がつと
まりますね」

「あきれた小娘だ、やはり竹次の姉だな」

「竹次は、きつとまともな人間にして見せます。では、これでおいとまをいたします」

忠助や人足たち、それに下女が、黙って見ているのも気にせず、お富は材木置場の横をぬけて河岸の道へ出た。

三年前に弟の竹次が、この伊勢屋へ小僧奉公にあがったのは、父の丈助が町奉行所の御用聞だったころ、伊勢屋へ出入りをしてた縁からであった。

年期も決めてなかったし、給金の前借もしていないので、一分二朱の金を返せば、これで伊勢屋との縁は切れる。

だが、まだ前髪を残したままの竹次が、伊勢屋の店から金を盗み出し、姿を消してから十日になる。

広小路から花川戸町を抜け、浅草寺の矢大臣門前の南馬道町へ帰るうち、いつの間にかお富の足は早くなった。

もしかしたら、竹次が家に帰っているのではないか、という気がしたからであった。

馬道の通りから矢大臣門のほうへ曲って右側、線香や香を売る店と、宇治から下ってくる茶を扱う永寿堂にはさまれて、長屋木戸がある。

そこを入ると両側に、八軒ずつの長屋があり、家主は馬道の通りで味噌屋をやっている伝兵衛という。だから、ここは伝兵衛店で、伝兵衛長屋と呼びそうなものだが、浅草

寺の許しをうけて矢大臣門長屋とっている。

そのかわり家主の伝兵衛が、隨身門ともいう矢大臣門をくぐって浅草寺へお参りをする人たちに、きたない看板やお札などは見せない、というのが自慢であった。

だから、ほかの長屋木戸と違って、祈禱や灸点の札、稽古所の看板など、一切かけさせていない。

木戸を入ってすぐ右側の家は、寺子屋の師匠の家で、と成り髪結床になつてゐる。

棟割ではないので、一軒ごとに腰高障子を入ると土間、右に台所、土間からあがつて三疊間、その奥が六疊になつてゐる。せまい庭がついて、庭木戸の外は細い通路で、浅草寺の土塀に面している。

店賃は月に四百文だが、五年前にこのあたりが火事で焼けたあと、家主の伝兵衛はすぐに元の通りの八軒長屋を建てた。

材木の値があがり、このご改革つづきの世の中で、かえって大工や左官の手間賃があがったので申訳ないが、といつて伝兵衛は、店子たちに頼むようにして、五百文にあげた。

お富は、この長屋で生れて、育ってきた。

お富と父親の丈助が住んでいるのは、左側の三軒目であった。

「お帰る、お富ちゃん」

右側の髪結床の中から、親方の文蔵が声をかけた。腰高障子に、丸く蛇の目の屋号が書いてある。

長屋の植木職の隠居が、文蔵に残り少い白髪を梳いてもらっている。ほかに草双紙を読みながら番を待っている客は、ひとりきりで、下剃は剃刀を磨いでいた。

「竹ちゃん、見つかったかえ」

文蔵に言われて、お富は黙って首を振り、自分の家の腰高障子をあげた。

この長屋の店子の半分以上は、お富の生れる前から住んでいるし、髪結床の文蔵もその一人であった。

家の中は、けさお富が出かけたときのままで、弟の竹次の帰ってきた様子はない。

奥の六畳間には、お富の針箱の横に、仕立てを頼まれた反物がきちんと積んである。

神棚に仏壇、簞笥が一棹、三畳間には茶簞笥、台所の皿や小鉢など、いつも決ったところにおいてないと気がすまないのは、お富の性分からであった。

二年前に、たった一晚寝たぎりの急病で死んだ母親は、もと吉原の江戸町二丁目、甲子屋という見世から出た花魁で、年期があけてから父親の丈助と夫婦になったのだという。

そのころの丈助は、馬道から猿若町、山谷あたりを縄張にする御用開の親分で、下つ引の乾分も五人ほど持つて小遣錢もやり、羽振りを利かしていた。

母が吉原から出ていたときの源氏名は染川、本名のお千代に戻ってから、丈助とのあいだにお富と竹次を産んだ。

小さいときからお富は、針仕事が好きで、十一のとき、母のいた甲子屋に通ってお針子になった。

しかし、女郎や新造の長襦袢のつくろいをするだけの仕事なので、お富は桂木という花魁に頼んで、胴抜きの長襦袢を縫わせてもらった。それが、お富の十三のときであった。

「この子は、ちゃんと仕立物のできる腕を持つてるよ」

甲子屋の女将がお富に惚れこみ、見世で抱えるお針子にしたい、と言ったとき、母のお千代は、はっきりそれを断った。

自分の娘を、吉原の水に染ませたくなかったのであろう。そのかわりお千代は、甲子屋のほかの見世からも、お富のために仕立物の注文をとってきってくれた。

「女だって、読み書きが出来ないと、先になって困るからね」

と言ってお千代は、同じ長屋に住む寺子屋の師匠、筒井多左衛門のところへ通わせた。

二部屋きりの長屋では、大ぜいの寺子に読み書きは教えられるいので、多左衛門は南馬道通りの金剛院の客殿を借りている。

多左衛門は中国筋の浪人で、お富より二つ年上の多十郎という息子がいた。

どんな訳があつて、筒井多左衛門が主家をはなれ、浪人の身になったのか、この長屋の者たちは知らない。

三年前に中国筋から、多左衛門は一人息子の多十郎を連れて江戸へ出てきたらしい。

この矢大臣門長屋に住むようになったのは、お富の母が亡くなる半年ほど前であつた。

身元引受人は、南馬道通りにある浅草寺子院金剛院の住職忠純で、筒井多左衛門とは古い知合いだという。

家主の伝兵衛は、多左衛門父子の生国や年齢などを町名主へとだけ、自分の長屋に住まわせることにした。

多左衛門は四十をいくつか越しているだろう、浪人暮しをしていたような暗い髷もないし、いつもきちんと髪を結い、長屋うちの蛇の目床で月代や顔を剃ってもらい、衣服にも気をつけている。

表通りの金剛院の客殿を借り、寺子屋をひらいてから、読み書きを習いに行く子供たちも増えてきた。

多左衛門の品のいい物腰、言葉づかいも評判がよく、そ

れに子供たちの面倒をよく見てくれるからであらう。

お富が寺子になるとき、長屋の多左衛門の家へ母のお千代と家主の伝兵衛が頼みに行つて、束脩もおいてきた。

朝早く、お富は町内の子供たちといっしょに金剛院へ通い、手習いをして家へ帰つてから、仕立物に精を出していた。

多左衛門の息子の多十郎は、やはり金剛院住職の世話で、浅草寺別当の書役をつとめ、月に二両の給金をもらうようになった。

浅草寺の第七世公英大僧正が、宝暦六年に遷化したあと、浅草寺は上野輪王寺宮の兼帯となり、別当がきて寺務を扱っていた。

その別当の下に大ぜいの寺僧がいるが、俗人でも能筆の者が必要なので、筒井多十郎は別当の鑑識みがねになつたことになる。

その息子の多十郎は色が白く、ふっくらした顔立ちの美男で、すぐ浅草寺本坊の中でも眼につくようになつた。

「あれで前髪が残っていたら、お寺でもきれいな振袖と袴という姿にして、評判の寺小姓になつていたろうね」

矢大臣門長屋の者たちは噂をしたが、多十郎はまじめな若者で、朝早く父と自分のために飯を炊き、朝の膳の片づけを終つたあと、木綿の着物に袴、大小を腰に矢大臣門か